

東京学芸大学連続講演会 第3回

「海外のエコミュージアムの事例から考える」

大原一興氏

横浜国立大学大学院工学研究
院システムの創生部門・教授



エコミュージアムという考え方

皆さんこんにちは、大原です。今ご紹介ありましたけれども、私は横浜国大で建築を教えている立場にあります。建築の分野の中でもいろいろな施設の計画やコミュニティーの計画というようなことを研究テーマにしています。エコミュージアムということについては、大体15年位前にこの言葉と出会って、というか知ることになりまして、それから大変興味を覚えてここしばらく勉強させてもらっています。今日は海外のエコミュージアムの事例から考えるというようなお話をいただいていますので、その辺の話をしたと思います。多分いろいろな方が来られていると思いますので、それぞれが納得がいくものを得て帰られるかどうかよくわかりませんが、とりあえず多分かなり入門編的な話からしないといけないんじゃないかなと思います。今日は、入門的な話、エコミュージアムとは何なのか、というようなことからお話をすることになると思います。

先ほど樋口先生から、現代GPという文科省のプログラムで大学がいろいろな新しい試みをしたということなんですが、私のいる横浜国大でも実は建築分野と経済学部が一緒になって、地域交流ということで地元商店街の活性化とか、その辺の活動をしています。なかなか横浜国大の場合はエコミュージアム立ち上げるような仲間が今のところいなかったものですから、残念ながらすぐ手に入る「活性化」をテーマにしたプロジェクトになりました。やはりそれはそれなりに大変重要なことだと思うんですが、ミュージアムっていうのは一過性のイベントではなくて資料とか知識とか技術とかそういうようなものが蓄積されていくことが大変重要なところなんです。私たちが今のところ横浜国大でやっているGPのプログラムでは、なかなか蓄積までいかない、いろんなイベントはやるんだけど

それが楽しかった面白かった刺激になった、で終わってしまうようなところがあります。そういう意味で学芸大のプロジェクトには非常に期待をしております。自分のところでできればいいなという風に思っているところです。

さて、今日は海外の事例から考える、ということで今日はお話したいと思います。若干欲張ってスライド写真を用意していますので、途中駆け足になるかもしれません。まず最初にエコミュージアムとは何なのかということをごく簡単に言ってしまうと、エコミュージアムというのは、地域まるごと全体で博物館にしていくことだと大雑把に言えると思います。ただこの博物館といった場合に、その存在そのものが海外の場合と違っていたりするところもありますので、今日私のパートでのお話としては海外標準のというか世界標準のですね、いわゆるミュージアムという概念でちゃんと考えましょうということなんです。日本は実は博物館大国で、登録されたものというのはごくわずかなんですけども、いわゆる博物館と言われているものが6000とも7000ぐらいという風に使われています。これだけ多い博物館といわれるものを持っているのは日本はかなり特殊な状況だと思うんですね。今これからお話しするエコミュージアムというのは、もともと世界的なレベルでは博物館学（ミュージオロジー）という考え方の中から出てきたものですので、日本のいう博物館とちょっと違うかもしれません。その辺をご理解いただいたうえで、地域全体をミュージアムとしてとらえていくものがエコミュージアムであるということをごく簡単な定義としてお伝えしておきたいと思っています。

(以下、パワーポイントを使用して説明)

どのようにしてエコミュージアムという考えが生まれてきたのか、ということをお話したいと思います。このエコミュージアムという言葉自体が生まれた時は、最初はフランス語のエコミュゼという言葉だったんですね。それを英訳してエコミュージアムということで今呼ばれているんです。この言葉が生まれたのは1971年です。71年にですね、ジョルジュ・アンリ・ヴィエール (G.H・リヴィエール) というエコミュージアムの考え方をずーっと進めてきた人が、当時ICOM (ICOM) 世界博物館会議のディレクターで、その会議で新しい博物館ということ表現したいと考えていました。そこにユグ・ド・ヴァリーヌという人がいて、この人はリヴィエールの次期のディレクターをやっていた人ですが、エコロジーとミュージアムと

いう言葉をくっつけてエコミュゼというフランス語の言葉を考えつきました。かなり思いつきの言葉です。思いつきの言葉で、もともときちんとした理論の上でできたエコミュージアムという概念があるわけではなかったんですね。

この写真ちょっとぶれちゃっていますけども、6月に中国でエコミュージアムの国際会議があって、その時のこの人の話が、実はそのエコミュゼという言葉はその当時の時代の産物であったということだったんです。当時70年ころには同時多発的に世界で博物館でいろんな試みが行われていたんです。主にそれは地域と博物館が一体になって何かやっていくということが大事なんじゃないか、ということをやられ続けていたのが70年頃だったわけです。博物館も神殿のような役割ではなくて、もっと地域と一体となって社会的な貢献をするべきだというようなものが35年前の時期に散々言われていたわけです。それで、世界各地でいろんな試みがあって、それらはコミュニティミュージアムと言われたり、ネイバフッドミュージアム近隣博物館という言われ方をされたり、いろんな博物館の取り組みがあったわけです。ユグ・ド・ヴァリーヌはちょうどですね、1972年にストックホルムで国連の人間環境会議があったんです。それに向けて今環境問題というのは非常に重要だということで、エコロジーというのはいい言葉だということで、エコミュージアムという言葉を発表し、世界中で動いている動きに言葉を与えたい、ということを考えてんです。そういう時に生まれたのがエコミュージアムという言葉なんです、という話でした。この時のこのフランスの話で、It happened それはたまたま起こったんだと、Not organized 組織されて作られたものではないんだというようなことを言いました。だからエコミュージアムというのは、きちんとした理論があって、原点があってそれで出来上がってきたものではなくてですね、つくられたものではなくて、その時代の中から必要性に応じてたまたま生まれてきたものなんだということなんです。

こういうことをきちんと理解して日本にも広まっていくといいという風に思っているんです。同時多発的にと言いましたけれども、例えばこれはヒュスビリンゲンというスウェーデンにあるエコミュージアムですが、これは1970年にもう運営され始めていたんです。つまり、エコミュゼという言葉が生まれる前の年ですね、この時に実体としてはエコミュージアムで、未だに彼らはスウェーデンで最初に出来たエコミュージア

ムだ、というふうに言っています。概念としてエコミュージアムだけでも、固有名詞としてはヒュスビリンゲンというものです。これはどういうものだったかという、赤い線で書いてありますけれども、リング(輪)のようになっていくつかの集落がつながっているわけです。それぞれの集落でやはり歴史的な遺跡だとか自然環境の大変豊かなところであるとかですね、それから産業遺産であるとかそういうものがたくさんあると。それをつなげていくことによってその地域全体、今回バイオリュージョンという言葉で表現されていますけれども、その地域全体の、似かよった地質や自然環境の営みを表現していくということを考えていたのがこの頃の時代だったんです。

このような中から今やエコミュージアムは世界中で展開するようになってきていて、日本は80年代後半くらい、ほぼ90年頃にやっと再認識、再発見されてきたという感じです。ですけどもヨーロッパなんかでは70年代に盛んにいろいろな試みがなされ、今では一世代代わった段階にあります。最近の動きっていうのは、中国とか台湾とかですね、それからイタリアなんか非常に勢いよく展開してきています。それで写真の真ん中にある「エコミュージアムへの旅」というのが私の本で、これは99年に書いたものです。今日お話しする内容はこの中に書いた話も半分くらいあります。このようにエコミュージアムはそういう形で展開してきました。

エコミュージアムにおけるエコとは、実体は何なのかとまだ内容の説明に入っていないんですが、なんでそのエコロジーという言葉を使ったかということなんですけれども、いま日本というか他の国でもグリーンとかいうような言葉に近づけてエコということが語られることが多いと思います。主にその自然環境であったり生物の生態系であったりですね、そういう風なことを中心にエコロジーというように語られることが多いと思うんですが、もともとの発想ではですね、特にフランス人が発想したっていうことが「みそ」なんですけれども、人間中心的に考えられているというのが現実の世界のエコミュージアムの推進している人たちの共通基盤なんですね。なぜかっていうとエコミュージアムのエコ、エコロジーっていうのはもともとはドイツ人生物学者ヘッケルがエコロジーという言葉を作った訳ですが、その語源がこのオイコスというギリシャ語になるわけですけど、このオイコスっていうのは家とか家族というような意味ですね。ギリシャ語ではオイコノミアというエコノミーの語源になる

ような言葉もあって、その元にもなっているのがオイコスです。このエコミュージアムではオイコスを語源にするということで、これ実は後付けなんですけれども定説になっている。オイコスってどういうことかっていうと、ひとつの家とか家族のなかでお互いにいろいろやり取りしてお互いに与えながら、且ついろんなものを享受しながらみんなが仲良くっていったら変ですけれども、やり取りをしながらよりよい段階に進んでいく。家族の中でいうとですね、大人が子どもにいろいろ面倒を見ながら子どもは逆にいろいろな刺激を与えてくれたりとか、大人にいろいろなことを返してくれるわけですね。そういうようなことによって家族全体が豊かになったり幸せになっていくというようなもの、という概念が家とか家族というオイコスという概念だと思えます。これを地域全体で、しかもミュージアムでやってしまおうというのがエコミュージアムという考え方です。

ここ数年思っているんですけども、大学の大学祭ではいろんな模擬店が出されますね。私も学生の時代はサークルやなんかで例えば焼きそば焼いたりとか、お汁粉作ったりとかですね、そういうことをするわけですね。そうすると、大学祭の時とはそれぞれの店が今日の売り上げいくらあったという風に儲かったと言って喜んでいるわけですが、実は自分たちの懐からお金がでてるんですね。つまりひとつの閉ざされたキャンパスの中で、お互いにお金を払って他の店に買いにいった、ある店でビール買って、ある店でお汁粉買って、みたいなことをやりながら、でも自分たちのサークルは儲かったという風なことを言って豊かな気持ちになる。こういうのがオイコスなんじゃないかと実感しているわけです。つまりみんながお互いにやりとりしながら自分が払ったものに対してはあまり損だと思わずに、自分たちが豊かになっていく、みんなが幸せになっていくというような、こういう形がオイコスなんじゃないかなって理解しています。

そういうことを地域全体でやっていく。昔はおそらくひとつの集落やなんかひとつの閉ざされた系の中で、それぞれができることをお互いにやり取りしながらですね、みんなが良くなっていくというような社会をつくっていかなくちゃいけない、ということで、それをミュージアムという観点からやっていこうというのがエコミュージアムになります。

従来の博物館との相違

そのときのミュージアムという観点ですね。そのミ

ュージアムというのはどういうことなのかというと、これが先ほど言いました世界博物館会議の定義によると、博物館とはまず「社会とその発展に寄与する」ということを目的としています。この点が日本の博物館法と若干違ってですね、日本の博物館法は「博物館とは」という定義があるんだけど、そこには目的が書かれていないんです。展示をしたり収集をしたりというようなことは書かれているんですけども、目的が書いてない。ICOMの定義では社会とその発展に寄与するということが目的としている。そこで何をするかというと、例えば研究教育レクリエーションに寄与するというようなことを収集したり、保存したり、調査したり、資料として利用したり、また展示を行うというようなことなんですね。

こういうような活動を地域全体でやっていくということがエコミュージアムです。これを考えるときに従来の博物館との違いということで考えると、比較的わかりやすいということの説明がユグ・ド・バリーヌとかによってなされてきました。

この「従来型博物館との比較図」で分かるように、左側が従来行われていた博物館の姿ですね、右側がエコミュージアムで行われていく姿なんです。まずどういう場所でミュージアム活動が行われるかということ、従来の博物館は当然博物館という箱物の建物の中。それに対してエコミュージアムはある一定の領域という言い方をしますけど、地域全体で博物館をやっていく。今回それが生活圏であり環境圏であるバイオリュージョンというような、そういう一定の地域ということですね。次にどういうものが博物館の中に陳列されたり展示されたりするのかということ、だいたい普通の博物館は地域にあるいろいろなものをコレクションとして収集して持ってきてしまいます。それを博物館の展示棚のところに置くというのが基本です。それに対してエコミュージアムでは地域の中にある遺産、文化遺産だったり産業遺産であったりいろんな遺産であったり、それから地域の特性、生態系の豊かなひとつのビオトープであったり、それから集合の記憶、その地域の人たちがみんなが持っている記憶、戦争の記憶などであったり、その町の近現代の歴史のようなものなど、地域にあって切り取って収集することがなかなかできないようなものがエコミュージアムでは対象になってくるんだということなんです。それからどういう人が関わるかということ、博物館では壁を隔てて内側に学芸員がいて、外側に来館者、訪問者がいるわけですね。この「壁を隔てて」というのが従来の博物館の概念だと

ということなのですが、壁を隔てて内側に専門家がいる、外側には素人の教わる立場の人がいるんだと。つまり博物館の展示で見せるということと見せられるという側がはっきり二極存在している。教えると教わるという二つの層がはっきり壁を隔てて存在している。それに対してエコミュージアムではどういうことが行われるかという、地域の一般の住民ができればその両方をやっていくということなんですね。一般に地域には何らかの達人という人がたくさんいるわけです。それから地域について、ずっとその地域に長く住んでいるという人たちはその地域のことを最もよく知っている。365日その地域で暮らすことによってですね、明日何が起こるかとか天候が変わるときにはどういう気配があるかというようなことも知っているわけです。

それから知識として、当然その地域の歴史、郷土史というようなものについてよく調べている人もいるし、非常に実感を持った専門家というのが地域にはたくさんいるわけですね。ある人は草花に関してはすごく良く知っている。ある人は神社のお神楽なんかよく知っているとかですね、というようなそれぞれ専門分野がいろいろある。そういう地域のお年寄りとか地域の知識を溜め込んだ人たちという人たちが今日は誰々さんの所に行って、その地域で作られる作物の話を見ましょ。次の時には誰々さんの所に行って、その地域の駅ができてきた成り立ちを見ましょ、とかですね、とにかくいろいろなテーマが次々と打ち立てられて、無限に、というか人の数だけきくとあると思いますけど、多様なテーマがあって、それぞれがそれぞれを知ることによってそれだけでその地域のことの学習が深まっていくだろうという考え方なんですね。つまり専門家がいる一般の人がいるんじゃないで、一般の人がある部分で専門家になってしまう。ある部分だけで専門的な知識を発揮することによって、地域の人たちで博物館活動ができるはずだという考え方です。このようにエコミュージアムというのは地域にばらけていく、そして地域でミュージアム活動をやっていくということです。

エコミュージアムの構造と活動

フランスでは、「記憶の領域」というような言い方をします。記憶というのは必ず人が介在しないと存在しないものなんです。物がそのままあるだけではなく、ものに対してその地域の人たちがどういう思いで、そのものを見てきたか、関わってきたかということが重要で、そのことによって領域つまり地域というような

ものが成り立っているんだということがエコミュージアムの基本的な考え方の一つになっています。

ちょっと前後するのかもしれませんが、こういう風に普通の博物館の収蔵庫というものにはたくさんのコレクションがあります。これが収蔵庫の一部屋の中に押し込められて部分的に展示室に持ち出されて展示される。それを地域に点在するいろいろな場所にですね、そのままそれを散らばらせたままに展示していくというのがエコミュージアムの考え方で、フランスのクルゾモンソレミーヌというところでは「破裂した博物館」という言い方がされました。ばら撒かれた博物館というニュアンスです。MINOM(新しい博物館学運動)という組織があって、これは先ほどのICOM(世界博物館会議)の中のひとつのまあ委員会のようなものなんですね。このMINOMのロゴが、左側がたまっていて、それが右側にいくほどばらけていくという、そういうロゴマークを作っている。これは結局閉ざされた博物館の形をどんどん開いていくと、地域にばらけていく、分解していく、分散していくことを示しているんだということなんです。ただでも実はよく聞いてみると、本当はばらけただけでは駄目でそれをまた再統合したり、もう一度再編成して、それで新しい価値をそこに生み出していくというような作業を含めていて、この右に行くのと左に行くのとは往復運動なんだというようなことがこの裏には実は隠されています。その辺が、世界的エコミュージアムの中では議論されているところであって、ばらけただけでは駄目だよと。それをつなぎあわせたり再統合するというようなことが重要になってくるわけです。

例えばこれはスウェーデンのベリスラーゲン・エコミュージアムの中で50箇所くらいのサイトがあるんですが、その中のひとつの村です。このグランエルデという村というか町にはですね、この中に例えば教会があったり、それから16世紀くらいの古い農家があったり、それから船着場、倉庫とかがあったりですね、いろいろな建物の遺産があります。で、こういうようなものを取りあえずみんなが保存して、それを収集物というかコレクションにみたくて展示して、それをみんなで見えていくというような活動をしているんですね。

このこと自体でエコミュージアムみたいなものですが、こういうことを行っていく村々が、さらに50箇所くらい集まって、実はエコミュージアムという全体ができている。先ほどのグランエルデというのはこの辺の単なるひとつの町なんですね。だからエコミュージアムというのは入れ子状になっていて、単にばら

けたものをばらけたまんまじゃなくて、それをもう一回束ねてひとつの村単位でそれをどう評価するか、解釈するか、認識するか、というようなこと。それがさらにまた全体が集まって地域全体を作っていくという、そういうちょっと複雑な構造をしています。

エコミュージアムでよく使われるキャッチフレーズというものをいくつかあげたんですが、エコミュージアムというのは過去のものだけに捉われないということがよく言われています。新しい社会を作っていくって、コミュニティを豊かにしていくために必要なものなんだという言い方がされているわけですね。

具体的にエコミュージアムという方法っていうのはどういうものがあるか、それはもう先ほどから言っていますように、ミュージアムをミュージアム活動ということを地域全体でやっていくということですから、ミュージアムの活動の方法をそのまま適用すればいいんだということなんです。日本でもだいたい大きく三つ博物館活動の内容が示されていて、調査研究、収集保全、それから展示教育というようなことがあるわけです。



海外における調査研究事例

調査研究に関しては、これから海外ではそれぞれどんな活動をしているのかということを紹介していきたいと思います。

例えば先ほども出てきたベリスラーゲンの領域の中には運河があって、その運河は自然環境も大変豊かなものですね。運河といっても水際の自然なんかよく保全されていますし、ここの環境を市民が調査するという活動をやっていたりします。こういう調査をするときに、日本だと誰であるかという、最近はいろいろ市民団体がやれるようになってきた、というか認められるようになってきましたけれども、誰かが調査費を

出してどっかのコンサルなどの調査会社がやるというのがまだまだ一般的だと思うんですね。それに対してこういうエコミュージアムという地域で、みんなでミュージアム活動をやっているという地域では、民間企業、例えばこの運河を利用して運送業をしている船会社がいるわけですが、この会社がまず船を出しましょうと。うちで船出して船内でお茶を出したり、お菓子を出したりというようなマネージメントをしてくれます。で、そこに行政の担当者、環境関係の担当者とかですね、が関わってきます。もちろんこの中には専門家研究者もはいつているわけです。それから住民のそれぞれのその川沿いにあるいくつかのウォッチンググループが自主的に活動していて、それぞれの地域でどんな生物が生息しているかみたいなことを定期的に調査するようなグループがいます。そういうウォッチンググループが、また一緒になってみんな同じ船に乗って探索調査をする。この日一日では全てはわからないわけですが、お互いの情報交換をしたり調査活動をみんなで進めていこうというようなことをやる。こういうのがエコミュージアムのひとつの特色だと思います。

調査にはいろんな調査があって、例えばこれはノルウェーのトーテン・エコミュージアムですが、そこで農場の歴史というのが丹念に調べられています。このストックされているファイルというのはすべて一軒一軒の農家の歴史、細かい歴史なんです。例えば誰々のところには何人の子どもがいて、そのうち誰がその農場を継いでとかですね、どんな作物ができてというようなことを事細かに末だに調査しています。調査の方法としてはもちろん聞き取りやなんかもあるわけですが、それからいろんな新聞、地方紙とかですね、地元紙の新聞記事とか教会の記録とかそういうようなものを題材にして末だに調査をしています。それがこういう風に一軒一軒の農場の歴史ということが、事細かにファイリングされていくということなんですね。そういうようなのは誰の役に立つのかはよくわからないけれど自分たち自身の大事な記録なわけです。

それからこれは、フランスの山城です。あちこちにあるわけですが、中世に造られた山城がいまは廃墟になっている、というか朽ち果てているわけですが、こういうようなところで、自主的な地元的话なれば素人集団ですが、専門家の助けを借りながら自分たちでいろいろ調査活動をして文献やなんかを調べたり、それから実測調査をするというようなこと

によって自分たちで昔この山にはこんなような町があったんじゃないかなという点まで書いて見せたりする。というようなこういう活動がされています。

それからこれはオーストラリアのメルボルンにあるエコミュージアムですけども、そこでは多民族ですね、移民されてきたいろいろな民族の人たちが末だにやっぱりそのマイノリティーになっている。情報的なマイノリティーというか記録に関してのマイノリティーというのがいて、それを定期的にエコミュージアムでは取り上げている。例えば去年はミャンマーの人たちの文化を知るとかというようなイベントを組んだみたいですけども、常にまだ知られていない。でも自分たちの仲間というような人たちの様々な情報を集めようとしているというような調査活動です。多民族の話というのは日本ではまだあまり一般化されていませんけれども、これから非常に重要なテーマになってくると思います。

歴史のある村では、例えば月に一回くらいのペースでいろいろな村で自分たちの村をもう一度見つめ直そうとか、歴史をもう一度確認していこうとかですね、そういうような調査活動がされています。ここにこの時参加していた若いカップルがいて、このお二人なんですけども。このお二人は都会から自分の田舎に帰ってきて、そこでなにか仕事を始めたいんだけど何ができるかわからないというところで、そこでこの調査活動と一緒に関わって、つまり今現在の自分たちの村の現状を学ぶわけです。こういう調査活動と一緒に学んだ結果が、この、数ヵ月後に送られてきたエコミュージアムのニュースレターです。この村でITカフェ、インターネットカフェをひらいたというような記事がありました。つまりコミュニティビジネスをこれから何か始めようという人たちにとっても、エコミュージアムという活動がきっかけになるわけです。

調査とっていいのかわかりませんが、先ほどベリスラージェンというエコミュージアムでは、手作りの小冊子なんですけど、そこに電話帳があるんですね。電話帳の中には何が書いてあるかというところ 50 箇所位いろいろな地点サイトがあるというふうに言いましたけれども、それぞれの関係者やなんかもちろんのこと、その関係者それからどういう情報・専門知識だったらどこに行けばわかるかみたいなことが書いてある。そういうカタログというか電話帳があるんですね。左側のがそういう専門技術を持っている人たちの能力カタログで、中を見てみると実はもういろんなことに関して書いてあるわけです。実は日本人が住んでいて「日

本語ができます」みたいなことが書いてあったりする。そんなような、それも向こうの人も知らなかったし、僕もびっくりしたんですけど、そんなような隅々まで調べられている。こういうのはよく最近の小学校の総合的学習やなんかで、人材バンクみたいな登録をやっていますよね。ああいうのに近い話なのかなという風に思っています。その地域にどういう人がいるか、ということ調べ上げるといこともエコミュージアムの大事な調査活動のひとつだと思うんです。

それからこれはパリの近郊のサンカンタンアンイブリンというニュータウンなんですけども、そのエコミュージアムでは、もともと畑、農地だったところにいきなりこう新しい団地が出現してきた時の記録を調査している。それが何に依っているかということ、そこに住んでいた人たちのいろんな写真が中心になっているんです。その古い写真、記念写真であったり、たまたま撮った写真であったり、そういうようなものを収集していく調査も行われたりしています。これは場所によってどういう調査が組み立てられるかというのは、それぞれの場所でのアイデア次第ということになります。

それから日本でも良くやられている地元学というものがありますが、その地域を調べるといことでこれは台湾の北投（ペイトウ）エコミュージアム。北投学というのをやはり地元学としてやっています。こういうふうに地元学としてその地元のいろいろな内容を市民の力によって学んでいく、というような調査活動が基本になっているということです。

収集保全・遺跡の保全

そういった収集保存に関してはどういうものを保全すればいいのかということ、当然昔の遺跡の保存なんかもあるわけですが。

最近のものとしては例えば朽ち果てた水車というような、壊れたものをとりあえず保存するというのがあります。これはこれだけで壊れたものを保存してもちっとも面白くないということで、ここでは何を保存したいかっていうことを地域の人たちがよく考えた末、この水車が「回る」ということが大事なんだということになりました。水の力によって水車がまわって、それが動力になって、この隣に鍛冶屋さん、鉄を鍛えるところがあったわけですけども、その動力にしていることが大事な残したいことなのだと。保全したい大事な点なんだということ自分たちが考えて、ここでは結局、自分たちで水車を作っています。これは何年

かかけて作っているみたいです。要するに水車が動力として回るんだ、水の力によって動力が起きるんだということ。そういう現象を保存しようということでの手作りの水車を今作っているところです。

今作っているところですよというのは、実はこれはです、何年前でしょうね、6~7年前に一度行って作っているところですよと言われて、3年前くらいに二度目に訪ねたのですが、その、最初に行ったときは3年後くらいに来てみれば水車が回っているからといわれたんですが、行ってみたらほぼ同じ状態でした。ですからそれから3年たってますけど、きっとまだ同じような状況だと思います。要するにこういうのをやれるというのは、手作りの作業で、市民の作業ですからアフター5に、あるいは土曜日曜に半分ビール飲みながらやっているようなそんなような作業なんですよ。でもこれをやること、それを実現させることがみんなの楽しみになっていて、だから持続していると。

これは例えば日本でやるとしたらどうでしょう。水車と言ったらどっかからお金をひっぱってきて、ドカンときれいな水車を復元してしまうというのが日本のやり方としてよくやられている方法だと思うんですが、こういう風にみんなでお金がない中で何を残そうとするかっていうのをみんなで議論して、ここではそういうきれいな木の水車じゃなくて「回る」ということを残しましょうという結論をみんなで出した。そのことに対してみんながこういう風に作業をしているというこういう姿ですね。こういうのがエコミュージアムでは本当に基本的な考え方なんじゃないかなと思います。

これはちょっと特殊なんですけど、デンマークのエコミュージアムです。古い古代住居を復元しました。住居を復元するというのは、専門家の力で実は造っちゃったんですね。それだけでぽつんと置かれていたわけですが、日本にもよくありますよね、竪穴式住居とかそういうようなものが復元されたりしているわけですが、その建物だけを置いてあるだけではしょうがないということで、そこで何を復元させようかとこのエコミュージアムで考えたのは、生活の保存、生活を再現したいという事なんです。そのためにどうすればいいか、生活する人が必要になるわけですが、ここは一週間ずつ一般から公募して家族を一組、ここで生活してもらいましょうということで公募をするんです。そうすると家族としても子どもにそういうのを是非教えてやりたいという親父っていうのは結構いるわけで、必ず意気込んでやってくるわけですね。

ところが大変です。もちろん電気も水道も当然です

が無いし、食べ物をどうやって調達するか、狩りをしたり、アヒル、ガチョウみたいなものを飼ったり、そういうような物から始めるわけです。いきなりやれといっても誰も何もできないし、そこでここで専門家ミュージアムのスタッフがインストラクターとして付けてくれます。当時どういう技術でどういう生活、どういう狩りをしてどういう調理をしてどうやって火を起こしてきたかというようなことですね、そういうことを教えてくれるながら一週間体験する。体験することが大事だっていうことで終わってしまわないんですけども、体験するのはその家族だけですよ。そこにミュージアムのアウトプットというか、その成果をそこで閉じ込めずにこれを一般に公開しているわけです。要するにこれを見に来る人がいるんですね。だから家族にとってもいい体験になるわけですが、それを見せてもらう一般の人達もいい展示物を見たということになるんです。そうやって苦勞している姿を見せる。これが生活を保存する保全するという話なんじゃないかなと思います。

もちろんいろんな伝統的な技術、産業というのを保全することも重要で、若い人にこういうものを続けていく事が必要で、この時にエコミュージアムではどういことをサポートするかということなんですよ。技術そのものはその職人が地道に伝えていかなきゃいけないわけですが、それに対してそれを支える社会の支援を求めるといって、一般の人にここではこういうものが作られています、ということアピールするというのが、エコミュージアムでの役割のひとつになっています。もちろんこういうものを育てていくということも行われているわけです。

これもそうなんですけれども、古代農法という以外にも採算にあわないような農業をやっているような人達をどうやって育てるか。それは今は結構インターネットやなんかで、直売というような形ができるようになってきてますけども、エコミュージアムはそれを一般の人との間に入って情報を提供していて、販路を拡大してくれるという、そういう役割をしています。

何を保存するかっていう話の流れですけれども、例えばこれは修道院が昔あった場所で、今は礎石しか残っていない。この手前の空き地になっている方です。ここで修道院を復元したい。お金があればもちろん建物は立てられますが、それができない。そうすると住民の人たちは何をするかというと、素人演劇です。自分たちでこの修道院で行われてきた歴史的な事実というものを自分たちで演じてみようとしています。

このことによってここで行われてきた歴史を保全するという事なんですね。形はなくなったんだけど、ここで何が起こってきたかということ伝えていくということ。これも保全保存のひとつの方法だと思います。

それからノルウェーのロロスという町があります。このロロスでは実は世界遺産に登録された非常にきれいな町並みがあります。きれいな町並みというのは銅山で栄えたところなんですね。日本でいうと足尾銅山のような所で、一時期はぶりが良かった町ですが、足尾銅山と同じように環境汚染が進んで、今銅山の会社はもちろん閉山というか閉鉱しているわけです。こういうところできれいな町並みが、当時豊かだったときの遺産として残っているわけです。

それだけじゃなくて負の遺産、汚染された大地というものも残そうということが、この人たちのエコミュージアムでの基本的な考え方です。これは環境名所にはならないかもしれないけれども、まぎれもなく自分たちの歴史を形作ってきているひとつの部分なんだということですね。汚染されたところは汚染されたまま残すべきだという考え方です。ここを訪ねたのはやっぱり5、6年前ですけども、その時に当事者というかエコミュージアムに関わってやっている人たちが真剣に悩んでいたのが、自然が回復しつつあるということなんです。草が生えてきちゃったと。それをどうしようか、そういう自然の復元力の強さというものを見せるのもひとつの手だけれど、まだしばらくこの負の遺産というマイナスな面を残しておきたいということで悩んでいました。

展示教育の普及

このロロスのミュージアムの展示室のひとつに、右側のほうにありますけれどもどくろの絵があって、やっぱりそういう意味でこの地域の人たちは環境汚染というようなことに対して非常に関心が高いわけですね。関心が高いのはひょっとするとエコミュージアムに関わっている団体だけかもしれませんが。右側にあるのは実はチェルノブイリ原発事故の時に、原発の灰がヨーロッパ・北ヨーロッパに流れていって、その時にどういう汚染があったかなということを示している図なんです。こういう中でノルウェーで原発をどうしようかというようなところの展示まで教育活動としてつなげていくというようなことなんですね。

展示教育普及というの、これは博物館で我々が一般的に接することのできる一番身近なところだと思います。

基本的には展示は手作り住民の人たちの手作りですね。

それからこれは実演展示。これは椅子の座面を作っているわけですけど、椅子の工場で若い頃働いた経験があるおばあさんなんか基本的にはボランティアで実演するというのがあります。

それから中国のミャオ族という、髪をこう長く伸ばして結っているのが有名なんですけど、ここでは刺繍がひとつ伝統的な技術として非常に重要です。これはお年寄りが子どもたちに伝えていくということですね。さっきも似たようなケースですけども、伝える、教えていくという状況を、ビジターというか外から来た人が見ることができるということです。ここは中国のですね、漢字を日本語読みすると貴州省のソーガ・エコミュージアムというところなんですけど、少数民族がたくさんいる地域です。

それからフランスですけども、エコミュージアムというのは例えば日本でも総合的な学習やなんかで子どもたちがそこに訪ねて学習をするためには非常にいい地域的な教材になるというのがエコミュージアムですね。各地でこういう風に子どもたちの学校から来ている子ども達のグループになります。それから当然子ども向けのプログラムなんかもこういうふう用意している。

それからちょっと異質かもしれませんが、リオデジャネイロのエスコラジサンバ（サンバ学校）というのがありますけれど、これは実はエコミュージアムの一躍を担っているんです。学校が終わると放課後、みんなここに来てサンバを練習するわけです。子どもたちが一生懸命です。なんとなくサンバっていうと楽しくて愉快でということだけで享楽のために踊っているような感じがするんですけども、このサンタクルス・エコミュージアムのサンバ学校では、自分たちのブラジルの歴史を踊りによって表現している。つまり歴史、もともとネイティブな人たちがいて、それから白人が来てそれから黒人がアフリカから連れてこられて奴隷制があったというような歴史を一通り流して、それを歌と踊りにして表現していると。つまり子ども達はここに来て踊りを学ぶわけですけども、それによって自分たちのアイデンティティというか、自分たちの歴史を学んでいるというのがエコミュージアムらしいサンバ学校なんです。さっきもありましたけれども、住民が自分たちの歴史をシナリオを書いて自分たちで演じるという、これも展示のひとつの手法ですね。

私は個人的にすごくいい展示だというふう思っ

いるのでお見せしますが、スウェーデンのネドレエトラダーレン・エコミュージアムです。自分たちの家にある、いろんな食品のパッケージを持ち寄ってきて、それが一体どこで作られどこからやってくるのか。これが結局世界地図一枚買ってくれば、あとお金がかからないんですね。みんな持ち寄りで、しかも空き箱ですからもう中に食品は入っていない。これを持ち寄ってどこから来ているか、知らせるだけでフードマイルージといわれているようなものが学習できるということです。そういうようなローカルアジェンダを考える拠点が、エコミュージアムの片隅で行われている。

いろいろ話が飛びますが、フランスのフレンヌ・エコミュージアムでは、地域を作っている中で一番地域に疎遠な人たちは誰なのかということを考えてときに、それは若者だということになりました。日本でもそうだと思います。中学高校生は、まちづくりに参加しないですよ。なかなか。

彼らを取り込んでいくということ、このパリ近郊のフレンヌという町では積極的にやっています。結局考え方としてはですね、そういう地域に疎遠になってしまっているということは、博物館なり社会教育施設が、そういう人たちに地域を考えさせるためのアクセシビリティ、つまり考えさせる為の手立てを講じてこなかったからいけないんじゃないか、ということ、を自己反省しているわけです。要するにこう地域に疎遠な人たちを作っちゃいけないというのが至上命題としてあって、そのために教育機関、博物館として何ができるかっていうことを考えていく。その時に、それならやはり若者の中に入ってその文化を考えなくちゃいけないということでヒップホップですね。こういうものがテーマになって、さらにグラフィティという落書きアートみたいなもの、こういうものをテーマにして、この時はあえて夜間展示室を開館するとかですね、そういうようなこともしていました。こんなような活動がエコミュージアムの展示教育でいろいろとやられています。

川を巡るエコミュージアム

川を巡るエコミュージアムでこれもちよっと駆け足ですけどもいくつか有名どころというか、川に関連するエコミュージアムをちらっとお見せします。

バスセヌというフランスにあるエコミュージアム。セヌ川の下流域。これはもう地域全体が地方自然公園というものに指定されています。この地方自然公園が中心になってエコミュージアムが成立しています。

これはフランスでは第一世代のエコミュージアムと言われているんですけども公園です。その中に点在する様々なものが訪ねる場所としてあって、それがエコミュージアム。ただここがですね、これは日本では非常に最初に紹介されて、今だに訪ねる人が多いみたいですけども、ここ数年訪ねた人たちの話ではあんまりよくないと。実はですね、エコミュージアムの館長の学芸員は、何年前でしようね、5年位前にもうクビになっています。つまりここは地方自然公園としての運営はしているんですけどもエコミュージアム、ミュージアムとしての活動っていうのはあまり今はやられていなくなっちゃいました。もちろん観光スポットとしては生き続けているんですけども。あまりやられていないところです。

ここはプレスブルギニオン・エコミュージアム。ブルゴーニュ地方、ワインの美味しいところなんですが、そのエコミュージアムの中にひとつの村ではその特色として水路というか川、小川があってですね、そこにサーキットというか巡り道みたいなのがあってですね、そこがいくつか水車がまだ残っているということなんです。

水車のサーキット、左上はですね、実はそのレストランに今使われています。つまり民間企業の所有になる水車。それから左下のこれはですね、この村の中にあるアソシエーション、住民の水車愛好会みたいなものがあるんですけども、その活動に対して自治体がこの建物を建ててくれました。でここが展示室になっています。その大きな石臼みたいなのがありますね。この小屋の中に水車愛好会が自主的に運営するミニミニ水車博物館みたいなものがある。それからこれはこのおじいさんが一人で守っている水車が右側にあるんですけども、個人所有の水車ですね。こういう風に水車のサーキットの中には民間が作ったもの、それから個人の所有のもの、それからこの水車博物館みたいにその団体が作っているもの、そういうものが一色単になっています。エコミュージアムというのは普通博物館というすべての収集物を自分たちの所有物にするのが原則だったりするわけですが、エコミュージアムは人のものを情報だけまとめてしまえばいい。一銭もお金がかからないって言ったら変ですけど、それをつなげていくことによってできていく。だから所有は誰でもいいということです。

ついでに今のプレスブルギニオンというエコミュージアムのディレクターをしているのがドミニク・リヴィエールという人で日本にも一度来たんですけども、

彼はそのエコミュージアムのジョルジュ・アンリ・リヴィエールというエコミュージアムを推奨した人とは親戚ではないんですが、リヴィエールというのは英語でリヴァーつまり川、川つながりで今ちょっと紹介しました。

それからフレイダーノというイタリアにあるエコミュージアムです。これは最近2002年くらいに建物が改修されました。もともとは倉庫ですけども、かなりしっかりした展示室を持っています。子ども達の学習の場みたいな形で活用されているんです。

ここは地域がもともと低い大きな川の脇にあって、そこにいろんな水路がはりめぐらされているんですね。その水路の復元プロジェクトというのが街としては今進められていて、それと連携して、例えばここはその水路の洗濯場とかそういうようなものが再現されて学習できるような形になっています。現在ほとんどが暗渠になっていて、日本でもありますけれども水に接するところが少ないんですね。それを都市部なんですけれども川というより水路の復元プロジェクトと連携したエコミュージアムのひとつです。

それからこれはノルウェーのノールトロムソというところで、昔先住民族のサーミという人たちが鮭を獲っていたと。今はこの地域にはサーミの人たちは今は実はいなくなっちゃっているんですけども、そのサーミの人たちが獲っていた漁法、鮭を獲る方法それを住民たちが学んでそれを再現している。学習した成果を年に一回、一週間ほど鮭を獲ってもいいという日があって、その時にその住民がその成果を発揮する。獲った鮭はみんな村の人たちで食べるわけです。

同じサーミの人たちの文化を大事にしているもので、ノルウェーのセルヴァランゲルというのも近いといえれば近いところですけども、そこでは古代住居を、これは考古学の専門家が関わってこの住居を再現しているというのがあります。なんとなくノルウェーの川のエコミュージアムというのは、そういうサーミの人たちの文化というものを大事にしているというところがあります。

それからこれはですね、川とかいうようなことをテーマにするときに話題にあがる、多摩川エコミュージアムという、川崎市でそういう基本構想を作って今活動しているものがあります。その時に川崎市で始めたものですから、東京都の対岸の方とのグループとの交流がほとんどないまま進められているんです。そういうことは非常におかしいんじゃないかと。一本の川っていうのはこっち側と向こう側と両方あるわけだから

分かれるのは変じゃないか思います。

そういう問題意識もってヨーロッパでいろいろ話を聞いていた中で、それならここが面白いよという風に教えてもらったのが、国境をテーマにしたエコミュージアムです。ここがフィヨルドなんですけれども、広い意味で川とっていいと思います。川が下を通っています。橋が架かって、この橋が国境の橋なんです。向こう側がスウェーデンだと思っています。手前がノルウェー、ノルウェーとスウェーデンの国境なんですけれども、この黄色い線の上がノルウェー、下がスウェーデン。見てわかるようにフィヨルドの入り組んだ川があるわけですけども、それがひとつの地形的な区切りになっています。でもここに点在する様々ないろいろな歴史的な遺産とか、自然環境というようなものは、これはもともとバイオリュージョンという考え方からすると、本来同一のものですね。

ところが歴史的に政治的に二つの言語を持ってますし、それから特にここでテーマにしているのが、第二次大戦のときにスウェーデンが中立をうたって、実はドイツ軍の進駐を許してしまっただけで、そのことによってノルウェーがドイツの傀儡政権下に置かれてしまったという歴史。ということでふたつのこの国境をめぐるんですね、国民の感情でいうと非常に微妙なところがあります。それをテーマにしようというそういう試みのエコミュージアムです。ですからこれに関してはスウェーデンのこっち側、下側の二つのコミューンとノルウェー側の上側の一つのコミューン、地方自治体、市町村ですね、それからスウェーデンとノルウェーの国もそうですけど、更にEUからも補助金をもらって、そういう幾つかの財布からお金を導き、引っ張ってきて、そこで運営しているエコミュージアムです。これは非常に面白い。要するに川のこっち側と向こう側で別々にするのはおかしいんじゃないかと。エコミュージアムと言う時にはやはり同じ地域ということ領域ということをおかしいんじゃないかと。エコミュージアムとすることを大事にするので、それは一緒にやるべきだということのいいサンプルだと思います。

もうひとつ、クリチャンスタッドというスウェーデンのエコミュージアムというのが、たぶん環境学習に関していうとひとつのお手本になるんじゃないかなというものです。ここにはヘルガ川があって、低湿地の部分なんですけど、下流域ですね、そのエコミュージアムです。

ここでエコミュージアムとっているのは、自然保護とそれから環境管理とか農業生産という部門。それから観光とかレクリエーションの部門。それから教育

部門、それから文化保護というような部門が、みんなが協力し合ってこの傘の柄の部分にあたるのがエコミュージアムなんだと、そういうモデルを言っています。ひとつの地域の中で様々な実際の中にはいろんな部門があったりするわけですが、そういうものを束ねるところ、傘の柄のモデルというのをここでは提唱しているわけです。

エコミュージアムは地域の一体感づくり

具体的に写真でお見せすると、地域にあるいろいろな環境資源やなんかを学習できる、これみんな別々の場所ですけども、学習できたりそこを観察できる場所を設置しているだけに思えます。ですが、それぞれの地点ごとに自主グループみたいなものが地域の学習をしています。それから自然環境だけでなく文化遺産みたいなもの、産業遺産みたいなものも学習していくというプログラムです。

その中のひとつにコウノトリの保護センターがあるんです。先ほど言いましたように、エコミュージアムというのはすべてを所有するわけではなくて、このコウノトリの保護センターは誰が中心になって運営しているかということ、日本でいうと野鳥の会みたいな自然保護連盟みたいなものがあって、そこがこれを運営しています。それがエコミュージアムのひとつのサイトになっているわけなんですけど、これだけポツンとあるだけだとすると、まだエコミュージアムらしくない。コウノトリということを考えて日本でも兵庫県の豊岡がコウノトリの郷ということで、エコミュージアムをずっと続けていますけれども、コウノトリという存在そのものがかなりエコミュージアム的ではあるんです。つまり人間の手のかかった生態系を根城にしているというか、そこで生息をするということで人間の手がかからないとコウノトリも生きられないということ。

もちろん生物としての保護、繁殖ということもやっているのと同時に、地域の人たちの農家が自分たちで自分たちの力で、簡単なことなんですけど屋根にこういう巣掛け台を用意しているということです。これでコウノトリが飛んできて自分の家の屋根に巣を作ってくれるのをみんな待っていると。こういう活動を誰でもできそうなのか、その気になればできるような活動がもとになってコウノトリをきっかけとして、その地域の人たちがみんなやっている。コウノトリが来てほしいとみんな思っているんだという、そういう地域との連帯感とか一体感みたいなものを作り上げている。単に生物の保護保全ではないんだということ

ですね。その村の一体感作りとかやっぱり自分たちも一緒にそこに住んでいるんだということの実感を作り上げるというエコミュージアム的な活動というのが力を持っているようです。とりあえずここまでにします。

<質疑応答>

質問者 A：マイクをつかって聞くほどのことではないんですが一番最初にですね、私不勉強なので先生がお出しになった本がどこで購入できるのか、簡単に教えていただければと思います。

大原氏：ありがとうございます。本屋で売っています。『エコミュージアムへの旅』という、99年の12月ですから、もう6年位前になっちゃいますか、出版社は鹿島出版会で値段は消費税込みで2675円です。

質問者 B：私もマイクロフォンを通じてお聞きするような話じゃないかも知れませんが、先生の前半のほうのお話に、「エコミュージアムというのは何かこういろんな事象なり物体を破裂させて破裂させるだけじゃなくともう一度それ整理して統合するようなそういった仕組みも本当は必要なんです」というお話をされたと思うんですね。今いろんな事例をご紹介されましたけれども、確かにエコミュージアムのプログラムをそれぞれの観点でその地域にしたがってこんな事例もありますよと、バーっとご紹介いただいたんですけど、受け止め方としてどうもまだ分散と破裂してこういったことがあります。こういった側面がありますよとおっしゃっておられたんですけど、当初の逆に破裂したものの統合という面から見てですね、今までの事例をどういうふうに理解すればよろしいのかとちょっと解説をしていただければありがたいと思います。

大原氏：そこまでいかなかったんですね、さらに3分くらいもらって大丈夫ですか？

日本のエコミュージアムは実はエコミュージアムごとに過ぎないレベルのものが多くですね。エコミュージアムっていうのは何なのかというと、さっき言いましたように、一貫したひとつの考え方を持って様々な展示物をきちんと再構成しないと博物館で見られる展示にできないわけです。だから、その作業がやはり必要なわけです。点在する資源そのまま置いただけではなく、それにある解釈を与えるとか、つないで

どういう順序に見るとどういうことが理解できるかっていうことを指し示さなくちゃいけない。そのためにエコミュージアムの学芸員にあたるスタッフが必要になるわけだし、そういうミュージアムマインドというか博物館学の視点をもつ人が居ないといけないと思っています。実は、最近の動きで結構注目できるものがあって、

シャッフリングという言葉よくお聞きしませんか。ハロープロジェクトのモーニング娘っていうのは、たぶん4、50人いる若い女の子のうち何人かが集まってできているんですね。それは入れ替えや交代もするわけです。という解説をここでしてもしょうがないですが。ユニットっていうのがいろんな組み合わせによってできているわけです。それぞれのユニットがいろんな特色を持つ、つまりメンバーのもともとの構成員自体は変わらないのに組み合わせによっていろんな意味ができてくる。これが博物館の展示と同じなんです。収蔵品とかっていう物はさっき見ましたように、収蔵庫にたくさん押し込められているわけだけど、そのうちのどれとどれを出して、どうやって見せるかっていうことによって訴えるものがぜんぜん違ってきます。これが大事なんです。

「鋼の錬金術師」(アニメ) っていうのが実はマイブームで大変感動していたんですが、錬金術っていうのは無から有を生み出すという夢物語じゃないんだ、科学なんだということをこの中では語っているんですね。この中で出てきているのは、壊すことと造ることは同じなんだということを謳っているんです。その中で錬金術の過程っていうのは、理解して分解して再構築するっていうそういう三段階なんです。これ博物館とかエコミュージアムの過程と同じだと思うんです。まず理解する。その地域に何があるかちゃんと調査して丹念に理解する。それを自分たちのあるがままのものとして理解するということですね。それからそれを分解する、ばらけて考えてみる。これは今までの近代科学がやってきたアトミズムとか専門分化して考えていく追求の方法だと思うんです。それをエコミュージアムのそれぞれの場所でやっていける。さらにそれを再構築しないと本当の創造には結びつかないんだということなんです。そのことによって組み合わせをどうするか、それをどういうガイドをするかによって新しい価値がきっと生まれてくるわけで、それをやろうとしているのがエコミュージアムの本当の次のステップとか、本来の目標なんだという風に思います。

そんなようなことで、今日のテーマの「海外の事例から考える」。これから我々考えていかななくちゃいけないし、いままでなかなか日本のエコミュージアムでは実現していないところだと思うんですけど、こういうことを考えていかななくちゃいけないんだという風に思っています。

質問者 C: 町田のほうでまちづくりやっているわけですけども先生の講演を拝見させていただいてですね、エコミュージアムが地域というところですね、密着しているまちづくりという言葉にすごく惹かれたんです。そういったようなアプローチで、現在言ってみればまちづくりっていうのは各地で盛んなんですけどあまりそういった言葉が出てこないんですね。ですから先生の考え方、すごく思い入れある言葉っていうのは先生独自の考え方、本来やはりそういった意味もっているのかですね、これを確かに我々この2、3年、対岸の神奈川県、私は東京に住んでいるんですけど、そういう意味でいろんな文化活動、地域活動、実際その記念碑を作ったり、池を作ったり、まちづくりを確かにそういったその活動体の調査にいいんですね。ですからそういった視点が本当に全面的に出せるならばですね、これは政策的にも普及するんじゃないかと思えますね。

大原氏: はい、そうだと思います。各地で行われているエコミュージアムという活動の中には、いわゆるまちづくりとほとんど同じというようなところがあるかあります。私も説明するのが難しいのは、まちづくりと言ったときに定義がなかなか難しいものですから、エコミュージアムと同義かって言われるとなんかまだ良くわからない。ただかなりエコミュージアムというのはミュージアム活動という方法を持ったまちづくりのひとつであることは間違いないと思うんですね。ただしミュージアムであることを忘れちゃうとミュージアムでないまちづくりになってしまって、それはエコミュージアムではなくなると思うんですけども。この辺が、だから言葉の問題で最初にいったユグ・ド・ヴァリーヌなんかエコミュージアムという言葉が非常に都合よく使われてきてしまっている最近の状況をちょっと憂えているとか、その辺りを心配しているということをよく言っているんです。だから、まちづくり活動とはかなり近いものであることは確かだと思います。ただミュージアムですから目的はさっき言ったように、社会とその発展の為といった

漠然としたものを目標に持ちつつも、ミュージアムを一つの社会教育活動だとすると、やはりそういうまちづくりをする「人材を育てる教育」なんだろうと思います。エコミュージアムっていうのはまちづくり活動そのものではないんじゃないかと。まちづくりをする人を育てるのがエコミュージアムなんじゃないかなというふうに思っています。そういう意味では様々なまちづくりと連動して活動していくことは非常に重要だし当然そういう使命をもっていると思います。まだそれが一緒のものだとなかなか私も言い切れなくてちょっと悩みどころの問題ではあるな、という風に思っています。スパッと答えられないところを突いていただきましてありがとうございました。

(一会場、拍手)

<講師プロフィール>

大原 一興 (おおはら かずおき)

横浜国立大学大学院 工学研究院 システムの創生部門 教授

1958年東京生まれ。工学博士。専門は建築計画学。研究対象は主として高齢社会の居住環境論および博物館学。博物館計画論と住民参加のまちづくりの接点としてのエコミュージアムの理念に遭遇し共鳴、1995年に呼びかけ人のひとりとして日本エコミュージアム研究会を設立。著書に『エコミュージアムへの旅』(鹿島出版会1999)、『生活視点の高齢者施設』(編著、中央法規2005) など。